

【誌上講義】

租税法研究指導〔プレ序論クラス〕第1回全体講義 —「論文を書く」とはどういうことか?—

劉 昊

イントロダクション

本学の研究指導は「プレ序論クラス」、「序論・本論クラス」、「プレ結論・本論クラス」、「完成クラス」と進捗に応じて4段階にクラス分けされています。この授業は第1段階である「プレ序論クラス」の最初の講義ということになります。

「プレ序論クラス」の目的は、論文を作っていくにあたって何をテーマとして選択するか。指導教員とよく相談しながらまずはテーマを固めていくということです。初回から第3回までは論文を書く上での考え方や、文献の読み方、文献の検索方法など、論文作成にあたっての土台となるような基礎的授業を行います。そして第4回からは、主査教員も入ったグループに分かれてテーマ決めに向け進めていく流れです。

一つ皆さんにお伺いします。これまでに卒業論文や修士論文などを書いたことある方はどのくらいいらっしゃいますか?あまりいらっしゃらない感じですね。今、論文作成の経験があると手を挙げていただいた方にちょっと思い出して欲しいのですが、その論文を書く時に全く苦労はなかったです、という方はどのくらいいますか?この質問はなかなか手を挙げにくいと思いますが、おそらく全く苦労せずに簡単にできましたという方はおら

れないのではと思います。もう1つ質問ですが、論文の書き方を過去に学んだことがあるという方はおられますか?こちらもなかなかいらっしゃらないのではと思います。

おそらく大学や大学院のゼミでは指導教員が内容面を確認して問題がなければそれでいいですよ、というような感じで皆さんも卒業されたのではないかと思います。確かに一般的な大学や大学院であればそれでも良いんだと思いますが、本学の場合、学生の皆さんは税理士試験の科目免除申請を想定しているわけであって、そうなると、やはり内容面や形式面等すべての面を含めてクオリティが高いものを作っていく必要がある。ですので論文の書き方や、論文とはどういうものかという基礎的な考え方を最初にしっかり身に着けないと、なかなか免除認定に足りうるだけの良い論文を作るのは難しいと思います。しかも皆さんは仕事もされていて、両立に非常に苦労されると思いますので、そういった意味でも、この「プレ序論クラス」の最初の3回の全体講義は非常に大事な回です。ぜひしっかり聴いて理解いただきたいと思います。

論文とはどのようなものか

この問題を考えるにあたっては、逆に「ど

ういうものは論文といえないのか」という視点で見えていきます。

『学術論文の技法』という書籍の中で、非

常にコンパクトにまとめられた良い例がありますので紹介します。論文とはいえない典型的なポイントが5つ提示されています。

こんなのは論文じゃない！！



- ①一冊の書物や、一篇の論文を要約したものは研究論文ではない。
- ②他人の説を無批判に繰り返したものは研究論文ではない。
- ③引用を並べただけでは研究論文ではない。
- ④証拠立てられない私見だけでは論文にならない。
- ⑤他人の業績を無断で使ったものは、剽窃であって、研究論文ではない。

出典：齊藤, 2005, pp.7-10

一つ目は「一冊の書物や、一篇の論文を要約したものは研究論文ではない」。そもそも要約をただけですと、構成や考え方、考えた内容は全て大元の著者のものなので、それだけでは論文ではないということですね。

二つ目「他人の説を無批判に繰り返したものは研究論文ではない」。研究というからには自分の考えというものが必ず必要で、仮に他人と同じような考えになったとしても、その過程や結論の導き出し方に皆さん独自のものがあるのなら論文になる可能性はあるのですが、他の人がいったことを何の考えもなしに批判もなく乗っかるだけだと論文にはなりませんよ、ということです。

三つ目「引用を並べただけでは研究論文ではない」です。引用は論文を作る上で非常に重要な作業です。注意していただきたいのが、どんなに引用の技法を学んで上手く引用したとしても、最初から最後まで全部引用では、

これはもう論文ではなく、ただの文献リストになってしまう。ここは注意が必要です。ですから引用する際は、あくまでも主体は皆さんである、ということ意識してほしい。引用を並べただけでは論文とは言えないということです。

四つ目「証拠立てられない私見だけでは論文にはならない」。内容的な部分でいうとこの点が一番大事といえます。やはり論文というからには、何かしら証拠や論拠が必要で、皆さんの私見や感想といったものを書きただけではだめですよ、ということですね。皆さんが論文を作り始める当初は、まだ素人的な思いつきというのがあるかもしれませんが、それは学問上非常に大事な視点ではあるのですが、それは資料や証拠があってはじめて成立するものです。その点を非常に注意していかないと、ただの感想、感情になってしまいます。

最後五つ目「他人の業績を無断で使ったも

のは剽窃であって研究論文ではない」。これは議論するまでもなく論外です。これまでの四点は、場合によってはもしかしたらレポートや感想文という扱いをうける可能性はありますが、この五つ目の点は剽窃か盗用にあたるため一発でアウトです。たまたま無意識的にやってしまうことがあるので、かなり注意が必要です。剽窃はだめですよ、人のアイデアをとるようなことはだめですよ、それは論文ではないですよ、ということです。

論文執筆とはどういう作業か

一言でいうと「資料を集め、整理しながら思考し、何らかの結論を導き出し、その上で、結論だけではなく、作業プロセスを論述という形で表現すること」と定義できます。(花井, 1997, p. 4)これだけを読むと非常に難しく聞こえて不安になる方もいると思いますが、実は私たちは日常生活の中でわりと近いことを経験しているんです。

例えば大学受験です。大学受験をする場合に何をするかというと、各大学の出題傾向や勉強できる内容などを調べますね。それから就職活動をするときも、受ける会社の社風や待遇や業績などを調べます。投資をする時もそうです。その上で、受験であれば勉強の計画、就活であればその動き方、投資であれば投資計画を考えていきます。ですから基本的には、研究をする、論文を書くということも今言ったような日常的な作業とそう遠くはない、といったん考えていただけると、少しは気楽に取り組んでいただけるのかなと思います。

す。

とはいえ、そんな日常的な研究とこれから皆さんが取り組む研究とではやはり違いはあって、日常生活の中での研究は結果が重視されることが多いのに比べ、いわゆる研究は、どちらかという結論に加えて、もっと大事なのが過程で、どういった流れでどういった根拠でどういった考え方で、今あなたはその主張をしているんですかということが非常に大事になってきます。

アウトラインを常に考える

ここで少しだけ、本学の学位論文の基準についてお話しておきます。

まず分量は5万字以上です。これに加えて引用文献、実際に使う文献ですね、これはだいたい50本くらいが目安と決まっています。これだけ長い文章を書くわけなので、何も考えずに書くというのは無理で、やはり書く際には、必ず計画を大事にしてほしいです。最初の段階では、何をやっているか全く見えないわけなので計画を立てるのは非常に難しいと思うのですが、ただ最初の段階でも、自分は何を知りたくてゴールをどこに置くのか、ゴールに行くためにどういった道筋をたてるのか、そういったことは常に考えていてほしい。この点は非常に大事だと思います。山に登るときに、きちんとした登山計画を立てていかないと遭難をするのと同じように、論文でも最初のうちに計画や自分の構想をしっかり持っておかないと十中八九溺れてしまうので、計画性というのは非常に大事です。

アウトラインを常に考える

第1章 序論	第5章 その他の裁判例及び判決事例の分析
第2章 交際費等の意義及び交際費課税制度の沿革	第6章 交際費等の判断基準
第1節 交際費等の定義	第1節 企業会計上の費用であること
第2節 交際費課税制度の沿革	第2節 支出の相手方が事業に関係ある者等であること
第3章 要件説及び交際費等分析フレームワーク	第3節 接待等のための支出であること
第1節 要件説	第4節 その他の要素
第2節 交際費等分析フレームワーク	第7章 結論
第4章 萬有製菓事件の分析	
第1節 一連の事件の概要及び争点	
第2節 萬有製菓事件判決	
第3節 萬有製菓事件第一審	
第4節 交際費等分析フレームワークを用いた分析	
第5節 萬有製菓事件控訴審の問題点の検討	

計画を立てるということに関連しますが、自分の論文のアウトライン、それを常に考え続けるようにしてください。ここに例を示したのがある修了生の論文の目次です。最初に序論で問題提起し、第2章で取り扱う条文や沿革をまとめる。この人の場合は、いろいろみていくとどうも交際費であれば交際費の判断基準といったところが怪しいな、と考えたわけです。それに関して、先行研究では交際費の判断基準をめぐるのは要件説といったものがどうも通説になっていると。でもそれは何かおかしいのではないかと、だからそこを解決したい、と思ったわけですね。そして本学の細川健教授の考えである〈交際費等分析フレームワーク〉を使えばどうやら交際費の判断基準が解決できそうだ、それを言いながら裁判例を分析し最終的に考察して結論を出そう、という一連のストーリーになっているわけです。このストーリーを皆さんも非常に大事にしてほしいのです。もちろん最初からこのレベルというのは作れないと思うのですが、ただこのストーリーを常日頃から考えておくということが非常に大事です。どういう問題

があって、どういうステップを踏んでどうゴールにもっていくのか、ということはずっと考え続けることが大事で、それを考えれば考えるほど、だんだんと自分の計画も見えてくるはずですよ。

テーマを決める

論文を書く時に最初に決める必要があるので「テーマ」で、「テーマ」＝「研究対象」・「取り上げる問題」です。ではテーマを決める上でどういった注意をする必要があるのでしょうか。

まず意識してほしいのが、自分の選択したテーマをよく理解してください、ということです。特に重要なのが問題意識を自分自身で見つけるという姿勢です。よく、書きやすそうだからという理由でテーマを選ぶ方がいらっしゃるのですが、それ自体は良いとして、ただそこで終わってしまっただけではダメです。なんとなく選んだテーマであっても、そのテーマから皆さん自身の問題意識や疑問を見つけ

出すということが非常に大事です。選んだテーマに何の問題意識も持てないとしたら、そのテーマをまだまだよく理解していないということ。そうなってしまうのなら、そのテーマはあまりやらないほうがいいし、選択したとしても続かないのではないのでしょうか。

テーマの選択に際しまずは関連する雑誌を手にとってみてください。関連雑誌の中でも、本学でお勧めしているが、「税務大学校論叢」や「租税判例百選」です。まずこの辺を手にとってもらい、この中でよく議論されているようなものを参考にするとテーマが探しやすいのではないかと思います。

もう1つ大事なのは、テーマを大きくとりすぎないこと。テーマが大きすぎると、どうしても記述が薄くなっていきます。皆さんは限られた時間の中で高いクオリティの論文を作っていく必要があるので、深い論述をしていくとなると、テーマを狭めて狭めて小さく設定する必要があります。例えば、交際費とは何か、税金とは何か、税法はどうあるべきか、のようなテーマは、少なくとも修士論文レベルでは向いていないでしょう。もちろん大きなテーマに価値がないということではなくて、それ自体は取り組むべきテーマだと思いますが、皆さんはかなり制約がある中で論文を作っていくわけなので、そういう制約の中では大きなテーマは向いていませんよ、ということです。ですからテーマは極力狭めるという意識を持っていただきたいと思います。

先行研究の重要性

次に意識をもっていただきたいのは、先行研究をおろそかにしない、ということです。そもそもどうして先行研究を検討する必要があるのか、ということですが、自分が取り上

げるテーマがこれまでどう研究されてきたのかということを知ることが一つです。これをやらなければ自分の研究がその分野やそのテーマの中でどういった位置付けになるかが明確になりません。論文というのは何かしら自分の議論がないといけないわけなので、先行研究をしっかりとっておかないと、自分がそもそも何を書くべきなのかわからなくなってしまいます。ですから先行研究は非常に大事です。

もう1つ、先行研究をおさえるということは、自分の論文に説得力をもたせることにつながります。皆さんこれから非常に苦労しながらも、良いアイデアが浮かんでくるかと思うのですが、ただそういったときは、結構自分のアイデアに溺れてしまうというか、なんていいアイデアだ、もうこれでいいのではないかという感覚に陥ってしまう可能性があります。重要なのは、自分が持っているそのアイデアをいかに説得力をもって読み手にアピールできるかということです。説得力がなければ、それは単に感想や私見であって論文とみなされる可能性が低くなります。論文の説得力を担保してくれるのが先行研究です。単純に「自分はこう考えています」ではなく、誰々の研究の立場に立つとそういうことが言える、誰々の指摘を参考にするとこう言及できる、と言ったほうが、読み手、もつといえは審査者に、論拠が明確だな、適当なことを書いているわけではないなということが伝わりやすい。先行研究がない論文は論文とは言えないということを常に意識してください。

先行研究へのあたり方

先行研究自体が大事だということは理解いただけたかと思いますが、ではどういうふう

に先行研究や文献にあたればよいのでしょうか。

先ほども話しましたが、皆さんにはまずその分野の中心的な雑誌を手にとっていただきたいと思います。先ほど言った税大論叢などですね。代表的な雑誌の場合、その分野の大家といわれているような研究者の議論が掲載されていて、良質な先行研究に当たる可能性が高くなります。また著名な雑誌や学会の雑誌というのは、査読という厳しい審査プロセスを経ているため、その分だけ良質な先行研究に出会える可能性が高くなるわけです。

もう1つは、そのテーマで主要文献となっているような書籍をどんどん手にとって欲しいということです。言い方を変えると、皆が引用しているような文献です。これからどんどん先行研究を読んでいくと頻繁に登場する文献というのが出てくるはずです。そうした文献は必ず原文に目を通すようにしてください。皆が引用するということは、その文献はそのテーマの土台となっている可能性が高い

です。ですからそれに触れておかないとそもそも議論が始まらない可能性がありますし、土台となるような文献を避けることはNGです。まずは主要な文献から読みはじめ、一通り終わったら周辺にある論文もとりあげていくという流れが良いかと思います。

次に大事なポイントとしては、新しい文献から読んでいく、ということです。新しい文献のほうが、そのテーマが今現在どういう議論になっている、どういった位置づけにあるのかという最新動向をつかみやすいと言えます。しかもそこから芋づる式に文献を集めることができ非常に効率が良いです。文献は必ず新しいものから読んでいくという姿勢を身に付けてください。

先行研究のまとめ方の注意

まずこのスライドをご覧ください。

先行研究のまとめ方の注意①

単純羅列型

金子(1997)は、～と述べる。武田(2000)は、～と主張する。
清永(1998)は、～と指摘する。増井(2007)は、～と述べる。

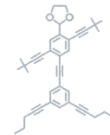
非常に理路整然と並べられているんですが、実はこのやり方はあまりしてほしくない。先行研究を並べているだけで、極端な話、何もいっていないのと同じです。このパターンを「単純羅列型」と私は呼んでいます。このまとめ方では、研究者同士の関連性というもの

が全く見えてきません。ただの文献紹介になってしまいます。この点は意識してください。

では具体的にどうまとめればよいのか。簡潔に言うと、先行研究同士の関係性を可視化しましょう、ということです。このスライドをご覧ください。

有機的関連型（これを目指そう。）

金子(1997)は、～と述べる。金子の論は、〇〇に着目していて、それと同様の考えを持っているのが武田だ。武田(2000)は、～と主張する。一方で、金子と武田の論は、〇〇の点で不十分だ。それを指摘したのが清永だ。清永(1998)は、～と指摘する。金子、武田、清永は、違う部分もあるけれど、〇〇という部分で共通している。でも、その人たちと全く違う視点に立つのが増井だ。増井(2007)は、〇〇に着目して、～と述べる。



この記載だと先行研究同士の関係性が見えますね。このパターンは「有機的関連型」という名称で呼んでいます。先行研究を自分なりの意味を持たせて繋げていくことが大事です。最初は非常に難しいと思いますが、できるだけ有機的関連型を目指しましょう。これがきちんとできると自分の理解にもつながりますし、審査の際も「きちんと理解されているな」という印象を持ってもらいやすいと思います。

次の注意点は「問題点が分散しないようにしましょう」ということです。そもそも先行研究とは、自分の勉強の成果を示すだけではなく、取り上げるテーマの必然性を示すために行うものです。問題意識はどんどん集約されていく必要があるのです、何の考えもなしに

関係のない研究まで入れてしまうと、問題意識が分散されることに繋がります。そうになると、読み手もこの論文の焦点は何かということがわからなくなってしまい、質の低い論文になる危険性があります。先行研究を分類したり、対比させたり、研究同士の共通点を見つけたり、そういう作業を通して、自分なりのリサーチクエスションを導き出していくのです。

以上のプロセスをまとめると、できるだけ多くの資料を集め、それを批判的に読む。そして自分で視点を見つける、ということです。その後、研究同士をストーリー化させて問題点を絞っていき、最終的に自分のリサーチクエスションを探る、そういった作業をしてほしいです。先行研究の検討というのは非

常に大事で、分野によっては修士論文がそれだけで終わってしまう場合もあつたりします。ですから絶対におろそかにしないという気持ちで、よく吟味をする、検討するという意識を今のうちからもっておいてください。

論文は誰のものか

論文というのは、あくまでも皆さんご自身のもの、ということをしつかりと認識してほしいです。私個人的には論文を書く上で一番大切なことだと思っています。

手前味噌になりますが、本学は他大学院に比べて非常に手厚い支援をしているという自負があります。特に、一人の学生に対して、指導する教員が2人ないし3人と複数体制というのは本学独自のシステムではないでしょうか。私自身もそうでしたが、一般的な大学院では、自分で研究して自分で論文を書いて、年に数回指導教員に出し、ゼミの発表はあるにしても基本的には放任主義というのが普通です。そういう意味でいうと、今ここにいる皆さんは非常に恵まれている環境にいますが、ただその一方で、「サポートが手厚い」＝「自分で手を動かさなくても良い」と勘違いしてしまう方が中にはいらっしゃいます。我々教員はあくまでサポート役で、実際に考えたり、リサーチするのは皆さん自身である、とこれは絶対に意識してほしいです。いったん論文を他人任せにしてしまうと、我々教員との議論が成り立たなくなってしまうたり、ゼミに出席しているだけで論文が完成するという錯覚に陥ってしまう。こうなると絶対に論文は完成しません。我々が皆さんの論文を代筆するということはできないことです。常に自分が主体となって論文を作るんだ、とい

う意識を持っていただきたいと思います。

今の話に関連しますが、自分の書いたものは自分で責任を持つということです。自分の文章に矛盾はないか、誤字・脱字はないか、書式・形式が整っているか、という点は毎回必ず自分で確認することです。我々教員も気づいた点はどんどん指摘します。とはいっても、教員側が一字一句、すみずみまでチェックすることは物理的に不可能です。皆さん自身が自分で責任をもって作っていく、という覚悟を大前提として持っていてください。

日常生活でもアンテナを張る

これが私からの最後のお願いです。とにかくどんな時でも論文のことを考えるようにしてください、ということです。大学院にいる時、勉強している時、図書館にいる時はもちろんそうですが、電車に乗っている時や家で寛いでいる時、お風呂に入っている時なども絶え間なく論文のことを考えていてほしいです。

マックスウェーバーも『職業としての学問』の中で、煙草を吸っている時や散歩している時、そういう時にこそいいアイデアが出てくる、といっています。このウェーバーの指摘というのは誇張でもなんでもなくて、私も、寝る前にベッドに寝転びながら論文のことを考えていたらいいアイデアが湧いた、という経験を何度もしています。

とにかく皆さんは忙しい社会人生活を送りながら、なおかつ2年間という限られた期間で論文を作り上げていくということが求められているわけです。ぜひ一刻一秒を有効に使ってください。そして質の良い論文をしつかりと作り上げていただきたいと思います。

(参考文献)

- ウェーバー＝マックス. 2018. 尾高邦雄訳. 『職業としての学問』. 第99刷. 岩波書店.
- 齊藤孝＝西岡達裕. 2005. 『学術論文の技法』. 新訂版. 日本エディタースクール出版部.
- 花井等＝若松篤. 1997. 『論文の書き方マニュアル—スリーステップ式リサーチ戦略の進め—』. 有斐閣アルマ.